

海音寺潮五郎文学における西南戦争 「鹿児島近現代」教育研究センター 客員研究員 吉満 庄司

はじめに

海音寺潮五郎は鹿児島出身の文豪で、歴史を題材とした優れた作品を数多く残したことで知られている。特に、西郷隆盛の伝記については、ライフワークとも位置付け、昭和44（1969）年に新聞・雑誌から引退宣言をし、直木賞選考委員など一切の役職も辞任して『西郷隆盛伝』の執筆に精力を注いだ。

しかし、昭和52（1977）年に78歳で逝去し、『西郷隆盛伝』は未完のままとなった。もっと長生きすれば、当然完成をみる事ができたであろう。しかし、全ての仕事を断って『西郷隆盛伝』執筆に臨んでから亡くなるまで8年の歳月があったにもかかわらず最後まで書き切れなかった。明治維新後の西郷隆盛、特に西南戦争における西郷については、概説程度の作品はあるにせよ、海音寺ならではの重厚な伝記とはほど遠いものである。何十年もかけて西郷研究に打ち込んできた海音寺であれば、そして史伝文学の第一人者である海音寺の筆力をもってすれば、完成させるには十分な時間があったと思われる。

そこで、小稿では「なぜ明治維新後の西郷隆盛、就中西南戦争における西郷隆盛について筆が進まなかったのか。」ということについて考えてみたい。

大口における西南戦争

海音寺潮五郎は本名を末富東作といい、明治34（1901）年、鉱山業を営む末富利兵衛の次男として鹿児島県伊佐郡大口村に生まれた。

その頃、西南戦争からわずか20年余しか経っておらず、まわりには西南戦争に従軍した人がたくさん健在していた。そして、

毎日のように西郷さんや西南戦争について話を聞かされた。『海音寺潮五郎全集』第十一巻の「あとがき」に「当時の薩摩には西南戦争に出たおじさん達が多数いました。ですから、その頃の薩摩の少年らは、その人々から西南戦争の話を聞き、西郷の話聞いて育ちました。（略）わたくしにとっては、西南戦争の話はイリヤッドであり、西郷の話はオデッセイだったのです。このごろになってわたくしは思うのですが、ひょっとすると後年わたくしが作家、それも歴史文学の作家となったのは、ここに因縁があるかも知れない。」と述べている。

また、海音寺潮五郎記念館が遺稿を整理する中で発見された「わが文学と故郷」という題の切り抜きには、「ぼくの生まれた所は、薩摩北部の大口市だが、ここは西南戦争のとき、激戦の行われた地だ。町の北に高熊という丘陵があり、その東方に坊主石という山があり、間を人吉街道がうねっている。人吉で敗れた西郷軍の一部がこの街道を退却してきて、坊主石に辺見十郎太が、高熊に池辺吉十郎のひきいる熊本隊が、防塁をきずいて南下してくる官軍を食い止めようとした。壘を奪われたり、奪いかえしたり、はげしい攻防戦が数日にわたってつづけられた。この攻防戦にまつわる話を、ぼくは幼いころからいくどとなく、またいくつも、おとなたちから聞いた。また、西郷軍として出陣していったおじさんたちから、いくさ話や陣中談をいくつも聞いた。これらの話は、子供の読みものとしては巖谷小波のおとぎ話くらいしかなかった当時の片いなかの少年であったぼくにとっては、もっともおもしろい小説であり、もっとも響き高い詩であった。ぼくは

呼吸をつめ、われを忘れて聞きほれた。後年ぼくが悲壮美を愛し、男性的気概に魅力を感じ、そんな作品を多く書く作家になったのは、ここにそのもっとも基本的なゆかりがあるのかもしれない。また、作家としての地歩を確保してくれたのも、このころに聞いた話を材料にして昭和12年ごろに書いて、いろいろな雑誌に発表した、およそ十編ほどの短編小説であった。この前年の夏、ぼくは直木賞をもらったが、この賞は当時はいまのように世間で大さわぎするものではなかった。ぼくの作家としての地歩を確立してくれたのは、直木賞ではなく、この十編ほどの短編小説であった。」と述べており、幼少の頃にまわりの大人から聞いた数々の逸話が、海音寺の作品の基となったことは確かである。

『南風薩摩歌』、『唐薯武士』、『柚木父子』、『椎の夏木立』といった大口における西南戦争を描いた代表的な作品は、いずれも当事者から直に聞いた逸話などを豊富に盛り込んで作品を構成しており、そこが海音寺文学の醍醐味と言えよう。換言すれば、西南戦争を経験した村の古老たちの体験談こそ、歴史小説家としての海音寺潮五郎の原点ということになる。

太平洋戦争における陸軍徴用と大口疎開

昭和16（1941）年、太平洋戦争の開始に伴い、海音寺潮五郎は陸軍報道班員として徴用されマレーシアに派遣された。現地の人々に日本文化を紹介し、日本の戦争の目的を理解させるため、いわゆる「文化工作」が主たる任務で、小説家や新聞記者などがその任を負った。したがって、前線の戦場に駆り出されることはなかったが、現地で実際の戦争の悲惨さと不条理さを身を以て体験した。クアラルンプールに1年余り駐在したが、その間、気管支炎・胃痛・肺結核を患い、徴用満期で帰国後もチフスと診

断され入院を余儀なくされた。

昭和19（1944）年には、戦況の悪化に伴い故郷の大口に疎開することとなった。大口には、戦後の昭和23（1948）年まで4年余滞在した。その間、ほとんど執筆活動は行わず、漢籍を中心とする読書に没頭した。また、西南戦争に従軍した人の残した陣中日記（従軍日誌）などを精読する生活を送った。そこには、少年時代にまわりの大人達から聞いた勇ましい軍功談ではなく、銃弾飛び交う負け戦の中、抗戦を繰り返す悲痛な姿も克明に記録されていた。

西南戦争従軍者の陣中日記を基に書いた『戦袍日誌』という短編小説がある。主人公の遠矢休之助は、年端もいかない2人の部下を戦死させてしまったことを悩み、その後自らも戦闘で亡くなる。作品の中で、「余ハ南洲翁ノ偉大ヲ知ル。ソノ心事ノ高朗ヲ知ル。ソノ憂国ノ衷情ヲ知ル。マタ、麾下将星ノソレヲ知ル。コノ戦ヒノ意義ヲ知ル。而モナホ二少年ノ死ハ、余ヲシテ闘ヒナルモノノ意義ヲ熟思スルコトヲ求メテヤマズ。」と海音寺は記している。そこには、戦争というものの凄惨さや無意味さを強く打ち出す姿勢がはっきりと確認できる。

大口は、高熊山激戦地に代表されるように、県下でも最も激しい戦闘が行われた場所であった。そして、そこで亡くなったり負傷したのは従軍した兵士だけでなく、飯炊きや荷物運びに動員された庶民も同様であった。家は焼かれ畑は荒らされるなど、今も昔も戦争の被害者は庶民だった。

また、大口郷の郷土年寄も務めた有村隼治は、政府軍に内通したと西郷軍に疑われ惨殺された。妻のスマも同様に殺害され、それと前後して大田甚太郎と園田助右衛門も有村の密使として政府軍に情報を流していたという嫌疑で殺害された。有村は、堀之内良眼坊とともに川内川開削工事の推進や、木崎溜池の構築など大口の産業振興に

尽力した指導者であった。藩と交渉し農耕用牛馬の費用を調達したり、大口郷の農業振興の守り神として戦国時代の武将・新納忠元を祭神とする忠元神社の建立も推進した人物である。こうした史実を基にして海音寺が執筆したのが『二本の銀杏』である。

海音寺潮五郎の葛藤

海音寺潮五郎は、敬愛する西郷隆盛の伝記を書くことに使命感を持っていた。海音寺がなぜ西郷の伝記を書くことにこれほどこだわったかについて、『海音寺潮五郎全集』第一巻掲載の「あとがき」で、「私が西郷の伝記を書こうと思いついたのは、私が西郷が好きだからです。その好きであるところを、世間の人々に知ってもらいたいと思いついたという次第です。」と述べている。また、「西郷は明治維新最大の功臣でありながら、後世の歴史家に誤解されている面が多々あり、そのゆがんだ西郷像が歴史知識として一般に定着してしまうことを避けるために、真の西郷像を書こうとした。」とも述べている。だからこそ、歴史の真実を明らかにする目的を持った史伝という形で西郷を描こうとしたのであろう。すなわち、西郷が好きで好きでたまらないということと、真の西郷像を描きたいというのが、西郷の伝記を執筆するようになった動機であった。

その最も敬愛する西郷が目指して実践した大義と、西南戦争の実態をどう整理すればいいのか、どう整合性を考えればいいのか、海音寺は大いに悩んだことだろう。そして、そこには太平洋戦争時にマレーシアに派遣され、そこで実際に体験した戦争の悲惨さや不条理さも大きく影響したと思われる。

『戦袍日誌』においても、西郷の憂国の情と戦いの意義を信じながらも、2人の少年の死を償うだけの意義があるのかと葛藤し

ている。補給豊富な官軍に対して、原始的な斬りみで戦うしかない西郷軍には、局地的な勝利はあっても劣勢を挽回する見込みはないということを分かっているながら戦い続ける主人公の陣中日記に、海音寺は自ら太平洋戦争で経験した戦争の愚劣さを重ね合わせたのかも知れない。

こうした葛藤が、文豪海音寺潮五郎を以てしても西南戦争における西郷隆盛を描ききれなかった最大の要因と考えられよう。

終わりに

これまで、西南戦争は西郷軍側から見た戦い、あるいは政府軍から見た戦いで語られることが多かった。

考えてみると、西南戦争50周年の頃は20歳前後で従軍した人々がまだ70歳くらいで存命であり、とても客観的に評価ができる雰囲気ではなかった。西南戦争100周年は、高度経済成長期を経て日本が急激な発展を遂げた時代で、それに乗り遅れないよう、「この繁栄する日本基礎を作ったのは我が郷土の英雄西郷隆盛とその他の鹿児島出身者である」ことを強調する風潮が強かった。したがって、西南戦争とは何だったのかということを客観的に考える状況ではなかった。

このような経緯を踏まえ、数年後に迎える西南戦争150周年に当たっては、地方の視点（特に戦場となった地域）や否応なく駆り出されたり被害を受けた庶民の視点も含めて、西南戦争とは何だったのかを複眼的にそして客観的に考え直す必要があるのではないだろうか。これこそが海音寺潮五郎が我々に残した課題なのかも知れない。